

【予稿集】

コロナ禍を経験した大学図書館の今後への一考察

長塚 隆

鶴見大学 名誉教授

nagatsuka-t@tsurumi-u.ac.jp

コロナ禍の中で大学キャンパスが閉鎖され、オンライン授業が中心になるなど大学運営や学生教育のあり方に従来経験のない大きな影響を受けた。コロナ禍による大学運営や教育への影響を受けて、今後の大学図書館を大学全体のキャンパスの再編成や教育方法の変更などの動向の中で検討し直そうとの考えが生まれている。海外での今後の大学図書館のあり方の検討を踏まえて、わが国での大学図書館の将来の方向性について考察を加えた。

A Perspective on the future of university libraries after experiencing the corona crisis

Takashi NAGATSUKA

Professor Emeritus, Tsurumi University

1. はじめに

2019 年末からのコロナウイルスの世界的な感染拡大は、未だ感染の終息が見通せないまま、すでに3年近くになろうとしている。この間に各国の大学および大学図書館は感染拡大による大きな影響を受け、キャンパスは閉鎖され、オンライン授業への移行や図書館の長期の休館を経験したところも多くあった[1,2]。

コロナ禍での様々な経験を踏まえて、米国や英国などで、今後の大学図書館のあり方やサービスの内容に関する多くの議論がされるようになっていく[3-8]。

これらの議論を検討することで、わが国での大学図書館の将来の方向性について考えてみたい。

2. 米国の大学図書館

本年(2022年)になり、北米で2つの報告書が公開された。ひとつは、米国の非営利団体Ithaka S+Rが米国とカナダの研究図書館をメンバーとする研究図書館協会(ARL)およびカナダ研究図書館協会(CARL)から依頼された調査報告書「研

究図書館は全学の組織戦略とどう連携するか」[3]であり、もうひとつは、米国図書館協会(ALA)の支部である大学・研究図書館協会(ACRL)による「2021-2022年の大学図書館の主要トレンド」[4]である。この2つの報告書から北米の大学図書館の現状と今後の方向性について見えてくることを整理した。

Ithaka S+Rが発表した調査報告書[3]では、米国とカナダの研究図書館を持つ大学の幹部63名にそれぞれの大学の長期ビジョンについてインタビューし、大学としての戦略的優先事項と図書館の情報サービス戦略との関係を明らかにしようとしている。そのため、従来の大学図書館を出発点とする分析ではなく、大学としての戦略的優先事項を確認し、その上で大学図書館の今後のあり方を図書館責任者などの意見を交えて検討する形式を取っている。

大学幹部へのインタビューでは多くの幹部が大学の発展には、STEM(科学・技術・工学・数学)の分野を統合的に学び、社会の発展に寄与できる人材を育てるために、特にSTEM研究領域における成長が大切であるとし、そのことを図書館の情報サービス戦略にどのように反映するかが課題で

あると指摘している。

米国では高等教育へのSTEM教育の導入が積極的に行われている。その際に、STEMに関連する研究分野を拡大するだけでなく、すべての学生が将来のデジタル社会に適応できるように多くの学生がSTEM分野について統合的に学べる「STEM教育」が導入され始めている[5]。

大学幹部への大学の戦略的優先事項についてのインタビューでは、

- ①STEM研究領域での成長の重視が最多
 - ②公立大学は地域行政と住民への関与の深化
 - ③米国とカナダでの歴史的に差別された人々との関係修復
 - ④キャンパスでの学生生活の質の向上
- などの回答が多く、これらが今後の戦略的優先事項になるとしている。

大学幹部への研究実践と支援についてのインタビューでは、

- ①多くの研究領域でのコンピュータの活用
 - ②パンデミックの影響は研究分野によって相違
 - ③研究力の強化と支援の学内での中央集中心化
 - ④オープンアクセスの進展と研究データ
- など学術情報の発信方法の多様化による研究コミュニケーションの変化が認められるとしている。

大学図書館としての戦略的方向性については、

- ①全学でのSTEM教育の重視戦略に対応して図書館として研究データ管理、技術移転やイノベーションの推進支援、研究補助金の申請サポートなど研究室との連携への取組みの推進が必要
- ②人文科学や特徴的なコレクションの一層の充実
- ③学生のニーズと学生の成長
- ④歴史的に差別されてきたグループとの関係是正
- ⑤大学に資金提供している行政組織の要望に対応した科学コミュニケーションの改善

以上の5項目としている。

一方で、大学・研究図書館協会(ACRL)の「2021-2022年の大学図書館の主要トレンド」[4]では、

- ①コロナ関連事項。一時的に閉鎖され、バーチャルサービスに移行し司書業務に重大な影響
- ②人種の平等を求める抗議行動。対応した図書館

のスタッフ配置の課題

- ③図書館スペースの活用。コロナ・パンデミックにより図書館やキャンパス施設の物理的スペースが教職員と学生の関心の中心に
 - ④冊子体の共同コレクションおよびシェアードプリントの拡大。複数図書館が共同で冊子体コレクションの保存・管理・利用のしくみ構築
 - ⑤すべてをオープンに。図書館員がより積極対応すれば学術資料への多様なアクセスが可能に
 - ⑥人工知能(AI)。現状は大学図書館でのAIの潜在能力の適用はほとんど未開発
 - ⑦データ。高等教育でのビッグデータ教育への関心を受け、図書館や司書がデータサービスを提供するため職員訓練への投資が重要
 - ⑧クリティカル・ライブラリアンシップ。伝統的概念に挑戦する図書館員の姿勢として使用
- 以上の8項目を挙げている[4]。

コロナ禍後を見据えた2つの報告書では検討の視点は異なっているところもあるが、コロナ禍による影響もあり、研究実践や教育方法に大きな変化が起き、そのことが今後も継続し、大学キャンパス内での図書館の役割も変化するので、そのことに対応できるような視野を持って取り組むことの大切さを重視している。

具体的には、今後数年間、予算削減の可能性や、長期間のバーチャルな仕事の後に実際のオフィスに戻る事等の課題があるなかで、共同のための新たな機会や批判的な視点に対するさらなる関心を持ち、シェアードプリント管理のための新規な取り組みにより[4]、大学図書館員が学生生活の充実や学習支援、大学組織への貢献、厳しい学術要請に対応できるようになることを期待していると言える。

これらの課題は、20年前の2002年に同じ大学・研究図書館協会(ACRL)のC&RL News[6]で報告された課題(①図書館員の採用、教育、継続、②大学における図書館の役割、③情報技術が図書館サービスに与える影響、④デジタル資料の作成、管理、保存、⑤学術コミュニケーションにおけるカオス、⑥新規利用者の支援)と比較すると、共

通する課題も多いがその内容は大きく変化していると言える。

3. 英国の大学図書館

英国国立・大学図書館協会 (SCONUL) は 2021 年に報告書「英国国立・大学図書館協会加盟大学の図書館利用を促進する要因 - 環境への適応的な変化からサービスの再構築へ」を公表した[7]。また、報告書の著者の一人である Cox は報告書ではほとんど分析が出来なかった長期にわたるコロナ禍の大学図書館への影響について分析している[8]。報告書と Cox の論文から英国の大学図書館の現状と今後の方向性について整理した。

報告書では、コロナ感染拡大以前の 10 年近くの時期に、英国の大学図書館では図書館資料のデジタル化が進展し、大学図書館の利用者はどこにいてもデジタル資料にアクセス可能な環境が拡大したにも拘わらず、学部学生、大学院生、教職員などの図書館利用者数は増加しており、その要因について分析している。

報告書では多くの関連する文献調査から、キャンパスの全体構成や教育方法の変化など大学全体の変化に注目し、近年における英国大学図書館の来館者数の増加要因を次のように考察している。

近年、英国では新自由主義的な考えが広まり公的な財政支援が減少し、大学の財政的な困難が増している。一方で、大学が受け入れる学生数は増加しているために、大学はキャンパスの再構成を図らざるを得なくなり、学生の勉学・研究の場である学部・学科の建物内で学生が利用できるスペースが減少している。さらに、学生あたりの教員数の減少もあり、学生中心の能動的な学習スタイルへの教育方法の変更などが起きていると分析している。これらの変化が他の学生との共同学習などの要望の増加となり、図書館の利用を促しているのではないかと推測している。

もちろん、英国の大学図書館がこれらの変化に対応して、グループワーク学習などが可能なように図書館内のスペース配置や動線を調整し、図書

館として集中できる静かなスペースと共同作業に適したスペースのバランスを変化させてきたことが、図書館利用者数の増加に繋がる大きな要因のひとつとなっていることは確かであるとしている。

英国の大学図書館はパンデミックにより 2020 年春には閉鎖を余儀なくされ、2020 年の夏から社会的距離を置き、来館人数を減らして徐々に再開された。しかし、図書館の利用は書籍の隔離、利用者の社会的距離や消毒体制などコロナ感染防止のために大きく制約された。蔵書利用は予約資料に制限されていたが、コロナ感染対策を施した図書館内の安全な学習スペースは学生がキャンパスに戻る際の大切な理由となったと分析している。

図書館の物理的空間の価値はデジタルシフトの中で失われていないことが調査結果で示されたし、コロナ禍でのオンライン授業の体験は「大教室での講義の終焉を告げる音」かもしれないとしている。一方で、学生のグループワークなど「質の高い対面での交流」の高い価値が再確認され、大学図書館はそのための重要な場であることに変わりはないとしている。

Cox は長期にわたるコロナ禍の大学図書館への影響について関連文献を分析し[8]、コロナ禍におけるデジタル化の急激な進展にも拘わらずスペースとしての大学図書館の重要性はコロナ後も変わらないのではないかとしている。また、今後の図書館スペースの利用に影響を及ぼす新たな要因として、従来は図書館の役割としてあまり考慮されていなかった「学生（および教職員）の福利厚生やメンタルヘルスへのサポート」を挙げている。今後は「学生の福利厚生やメンタルヘルス」は大学全体として重視される新たな要因になるとしたうえで、図書館として学生がストレス解消やリラックスできるような新しいタイプのスペースを作ったり、認知行動療法のテキストや小説のコレクションを置いたり、勉強スペースに自然光を取り入れる、あるいは昼寝のためのエリアを作るなどの事例を紹介し、これらのことが大切になるとしている。

4. まとめ

北米や英国の事例から、大学で生じている変化が今後の大学図書館にどのような影響を及ぼすかの視点から分析することの重要性が再認識できる。

北米や英国の事例で、大きく共通している点は、今後も情報技術の発展による資料やデータのデジタル化が促進されていくが、一方で大学の財政上の困難な状況が継続するなかでは学生や教職員にとって図書館のスペースの新たな役割が増大していくとの指摘であろう。

北米や英国の大学や大学図書館についての分析をひとつの参考として、わが国のそれぞれの大学や研究機関における組織としての戦略的優先事項を分析し、今後のわが国における図書館情報サービス戦略を再度練り上げることが、パンデミック後の大学図書館に期待されていると言えよう。

注・文献

[1] 長塚 隆. 新型コロナウイルス感染症の拡大と図書館 - (続編) 感染の再度の拡大に備える. 日本農学図書館協議会誌. 2020,no.200,p.11-18. <http://jaald.life.coocan.jp/publication/bulletin/> (参照 2022-10-10).

[2] 長塚 隆."コロナ渦で急進展する国内外の図書館リモートサービスの新たな試みと今後の可能性-大学図書館の事例を中心に". 図書館総合展. 2020-11-22. <https://2020.libraryfair.jp/forum/2020/f150> (参照 2022-10-10).

[3] Cooper, Danielle M., Catharine B. Hill, and Roger C. Schonfel. "Aligning the Research Library to Organizational Strategy." Ithaka S+R., Last Modified 12 April 2022. <https://doi.org/10.18665/sr.316656>. (参照 2022-10-10).

[4] 2021-22 ACRL Research Planning and Review Committee. "Top trends in academic libraries - A review of the trends and issues" C&RL News, 2022, vol.83,no.6, p243-256. DOI: <https://doi.org/10.5860/crln.83.6.243> (参照 2022-10-10).

[5] 2021 Progress Report on the Implementation of the Federal STEM Education Strategic Plan, (A Report by the Office of Science and Technology Policy), December 2021. <https://www.whitehouse.gov/wp-content/uploads/2022/01/2021-CoSTEM-Progress-Report-OSTP.pdf>. (参照 2022-10-10).

[6] Hisle, W. Lee. "Top issues facing academic libraries: A report of the Focus on the Future Task Force" C&RL News, 2002, vol. 63, no.10, p714-715,730. DOI: <https://doi.org/10.5860/crln.63.10.714> (参照 2022-10-10)

[7] Cox, Andrew M., and Benson-Marshall, Melanie. "Drivers for the Usage of SCONUL Member Libraries, From Adaptive Practice to Service Redesign." SCONUL Research Project, 10 February 2021. https://www.sconul.ac.uk/sites/default/files/documents/Drivers_for_the_Usage_of_SCONUL_Member_Libraries.pdf (参照 2022-10-10).

[8] Cox, Andrew M. (2022) "Factors Shaping Future Use and Design of Academic Library Space" New Review of Academic Librarianship, DOI: 10.1080/13614533.2022.2039244 (参照 2022-10-10) .